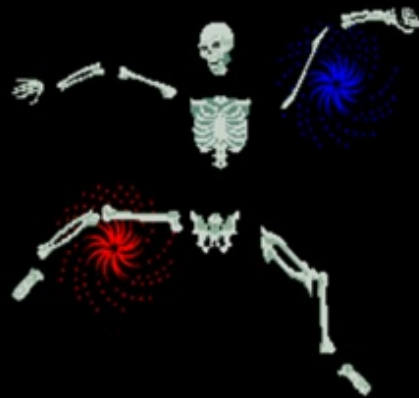


奇妙な夢



九谷六口

奇妙な夢だった。

変な外国人が、ソロソロと出てくる。

「私は、……です。お久しぶりです」

久しぶり？ 何を言っているんだ。会ったこともないのに。

どう言うことだ、次から次へと出てくる。既に十名を越えた。連中は親しげに握手をして去って行く。中には、頬にキスをする者もいる。男と頬擦りをするだけでも気持ちが悪いのは何てことだ。また男が来た。

「やっとお目に掛かれました。宜しく」

何と私を抱きしめ、ニコニコ笑って立ち去ろうとした。

「ちょっと待ってください」

「エッ？ 何か……」

「貴方、誰ですか？ それに大勢の人が貴方と同じように出てきましたが、一体、貴方たちは何ですか？」

「困りますよ、そんな無責任なことを……」

「無責任？ 私には関わりのない人たちばかりです。それに皆、見掛けは外国の人なのに日本語を話す」

「私たちを知らないなんて……。やはり無責任な人だ。でも……だから私たちを産んだのですね」

「産む？ 私は男ですよ」

「男か女かなんて関係ありません。産んだと言葉が気になるようでしたら、貴方の分身と云えばお判りいただけるのでは」

「……余計、判らなくなりました」

「産みの親とも言える貴方に説明するのも変な話ですが、会った人たちの名前を良く思い出して

ください」

必死になって思い出した。

チャラン・ポーラン

ソナナ・ヤメーテ

メチア・クチア

ウツソー・ダラケン

ハラー・グーロー

ミズ・ムーシー

クルク・ルパー

キイチ・ガイ

クシヤン・ハクシヨーン

アラン・カギリ

イヤン・バッカーン

ペチア・パーイ

カーサン・テ・ベツソー

「で？」

「すべて貴方の分身です。発音に惑わされたから理解できなかつただけです」

必死になって考えた。

「チャラン・ポーラン……チャランポラン？ メ

チア・クチア……滅茶苦茶？ 嘘だらけ、腹黒、

母さんデベソ…… ちょっと、私の母は、出贖じ

やない。それに私は男だ。ペチャパイなんて」

「お父さん、世の中とは、こんなもんです。蛇足

が付きもの。彼らは、単なるオマケです。自己紹

介が遅れました。私は、シツレーニン・ダ・シャ

ーレと申します」

目が覚めた。パジャマは、寝汗でグツシヨリ！

夢で良かった。いや、何処か変だ。医者に診て

もらおう。